

集団の成長の過程



竹 下 由 紀 子

保育所や幼稚園に新しく入ってきた子どもたちは、まず組分けをされ、幾人かがきめられた一つの部屋に入れられ、一人の先生の指導に托される。しかしこのような入園早々の子どもたちを、わたしどもは、心理学的な意味では、かならずしも集団とは呼ばない。

たとえ一つの部屋に集まっても、おたがいはまだ見知らぬものだろうしが、てんでにばらばらな関心で勝手に行動しているとすれば、それは個人の集合にすぎない。しかしそのうちに日が経つとともに、おたがいの名前をおぼえ、ことばを交したり、いっしょに遊んだり、けんかをしたりして交渉をもつようになる。いつも友だちにあれこれ指図をする子どもや、その子のあとについていく子どもなどもあらわれる。水飲み場では並んで待つきまりが

できたりする。他の組の子に「ぼくたちの部屋だから入らないで」などということもある。このような変化は、どれもみな、子どもたちの集団としての成長を示す徴候だといわれている。

一、集団の定義

顔もみしらぬ子どもたちが、ただ集まっただけの状態を心理学的な意味では集団とは呼ばない。とすればどのようなものを指して集団というのか。これをまず明らかにしておかなければならない。

集団という以上、人間が二人以上いるということが必要にはちがいないのだが、それだけでなく、すくなくともその人々がおた

がい作用しあっていることが、心理学的な集団の定義の最低の条件であるといつてよい。集団の定義は、人により立場によりで幾分かの相違があり、もつと狭く、ほかにもまだ、共通の目標の存在や、成員の一体感や、成員相互の間の一定の心理的關係の保持などの条件があげられることもある。

これらの心理学者が考える条件は、社会学などで扱われる集団とは若干違っている。主な相違点は、社会学的な観点からの集団は、主として外的な条件を規定しようとするのたいていして、心理学では個人的な世界を通して行動と関連する条件をみいだして重視することにあるといえよう。したがって、たとえば、団地が建設されてそこに入居した人々をただ近くに住んでいるというだけでは、心理学的な集団とは呼ぶことはできない。

けれども、その人々が公共設備の改善について役所への申入れをするというような、共通目的をもつて集まるなどの接触をもち、世話役や当番などの役割ができてくれば、集団となる。

ところで、集団を定義づける条件がどのような形で適用されるかにはかなりの幅があり、それがどのようにあらわれるかによって定義される集団の性質も区別される。よく使われるものを二つばかりあげておきたい。

その一つは、人間の結びつきの次元に関しての区別である。人

の結びつきに、空間的に接近している場合と、感情的な交流による結びつきとの二つを想定し、前者を外面集団、後者を内面集団と名づけて区別する。教室にいる子どもや運動場の遊びの集団などは、外面集団であり、外部から観察できる。

ところが、外面から観察できる対人関係とは別に、人々の間に好きとか嫌いという感情の流れによる対人関係が存在すると考えることができ。この目に見えない感情の流れというのはモレノによってテレと名づけられたもので、このような事情を考慮に入れることで、集団現象にたいする心理的理解がより正確になることが多い。このテレによる対人関係を明らかにする方法としてモレノによって考えられたのがソシオメトリック・テストである。ソシオメトリック・テストにあらわれる内面集団は、実際に外面にあらわれているものと同じではないことが多い。たとえば、ままごと遊びをしている子どもにたいして「あなたがままごと遊びをいっしょにしたい人はだれですか」という質問をしてみると、現実にいっしょに遊んでいる子どもの名があげられるとは限らない。つまり、心理的な集団は、物理的に同一空間にいない人の間に存在することがあるといえる。

もちろん、現実の集団は、この両方をお互にかねそなえていることの方がふつうである。感情の流れは、近くにおいて、接触の多い人た

ちの間に交わされるのが人の自然である。ただし、もしこのズレが大きい時には、現実の集団には緊張が強く、分裂を起こしたりする可能性がある。ズレは、自発的な集団より、外から規定された集団の場合に大きくなりやすいのは当然である。

ただ、幼児の場合には、特に友人関係が外的な条件によって規定されやすいと思われるし、またソシオメトリック・テストの結果の信頼性にも問題があるので、必ずしもこの見解は適用できないのではないかとも思われる。

もう一つ、主として集団の目標と集団形成の契機に関連して、サイキグループ（心理集団）とソシオグループ（社会集団）の区別がある。サイキグループというのは、個人的欲求の満足を主目標とする任意の結びつきによる集団を指し、そこでは、各人の自由な感情の表出が許され、役割や責任などは課されないというような特徴がみられる。これにたいして、ソシオグループというのは、客観的な目標追究の活動が中心になって保たれている集団で目標達成に必要な手順や役割が比較的是っきり決まっている。

幼児の自由遊びの集団は、ほぼサイキグループとしての性質を帯びている。幼児にあっては、ソシオグループの形成は困難なことが多い。

ただし、これも、現実の集団についてみれば、純粋に、サイキ

グループかソシオグループかのいずれか一方の要素だけしかもたない集団というものは稀である。たとえば、主目的は社交集団でサイキグループとしての性質をもつものであっても、集団がある程度安定して存続するためには、なんらかの客観的な目標を設定することが必要な場合が多いし、他方、社会奉仕を目標として結成されたソシオグループとしての会でさえも、それなりの個人的欲求をみたすような機能を備えていなければ永続きはむずかしいものである。

発達のみにみて、子どもたちは、最初は個人的な欲求の満足をもどめて集団に参加しはじめる。したがって、子どもの参加する集団は、サイキグループ的色彩の濃いかたちで出発するのはごく当然と思われる。そのようにして集団に参加しながら、その経験を通して、集団に参加することの喜びと、個人的欲求をコントロールすることを学び、徐々にソシオグループへの参加が可能になると考えられる。これは、家庭・幼稚園・学校というような集団を比較してみるとよくわかるであろう。

子どもが誕生後最初に属する家族集団は、サイキグループとしての性質を強くもっている。家庭では、子どもは、自分の要求にもとづいて、好きな時に家族と接し、自由に行動することが大幅に許されている。これにたいして、幼稚園は、これもかなり個人

的な欲求の充足を与えるような活動が多くくみ込まれているといえ、公的な集団には違いなく、教育を目標とするソシオグループとしての要素が多くなる。一定の時間に集まり、一定の秩序にしたがって行動しなければならぬ。

ひとり勝手な行動をすることは制限される。学校になると、学習目標が、もっとはつきりし、学習達成のための活動が中心になり、よりソシオグループの要素を備えている。

二、社会心理学的な観点と発達心理学的な観点

本文の主題は、幼稚園における集団の成長の過程について述べることである。この場合に、成長をとらえるには、二通りの視点があり得る。

その一つは、もちろん、社会心理学とか集団力学の視点からの研究である。この立場からは、集団の成長を、はじめおたがいに関係をもたなかった人々が、まとまって全体行動をとるようになることとして捉える。集団力学の用語でいえばこれは凝集力の増加である。凝集力というのは、集団の成員を集団の中にとどまらせて、目標に向かっての活動を続けさせる諸条件の総体として定義されている。

凝集力を増す条件、すなわち集団の成長を促す条件としては、集団規範の出現、共通の動機や目標の存在、リーダーや仲間の人格的魅力、友好的なふんい気、目標への接近など多くの要因があげられるが、大別すれば成員への統制的な力と魅力となる。簡単にいえばメンバーを強制して集団にとどまらせ、活動させることと、メンバーを魅きつけて集団にとどまらせ、活動させることのできる集団の条件ということになる。

実際には、これら諸条件はかならずしも独立ではなく、相互の間にもまた関連があるように思われる。また凝集力そのものは、結局これら条件の総体なのであるから、個々の集団の凝集力が何によってきまるかは、一がいには定められず、集団自身の持つ性質によって違ってくる。たとえば、一般論としては、集団目標の達成と集団の成長は少し別なのだが、集団によっては、この両者はかなり併行して起こる場合もあるだろう。

このような関係や法則をあきらかにするためには、実験集団や現実の既存の集団の観察や測定をおこなう。この分野の研究の中にも子どもを被験者としたものもいくつかみられる。しかし、被験者の発達段階の違いは考察の対象になっていないことが多い。むしろ子どもの集団について得られた結果と、成人の集団について得られた結果とに一致をみいだすことによって、一般的な結論

をもとめようとする。

他の一つは、発達心理学的な視点からの研究である。この立場からは、子どもの発達に応じてその集団がどのような特徴を示すかに関心を向ける。集団の成長は、主に、個々の子どもの発達に伴う変化として考えられているかのようにみえる。たとえば、年齢の上昇に伴って、友人数や遊び集団の大きさが増加するか、交友関係が安定するか、チームワークは、八、九歳頃から可能になるとか、いふふうなとり上げ方がなされてきた。

右のような二つの領域は、それぞれに貴重な資料を提出しているものの、幼稚園教育における望ましい条件や可能性を追究しようとする時には、どちらの一方をもつても不十分な点が残ってしまふ。

これまでの集団力学の研究によって得られた知見である凝集力を増すための条件を、年齢の差を考慮に入れずに、幼児集団にあてはめるのが無理なことは想像に難くない。そもそも、従来の集団力学的研究の多くが、小学校以上の年齢段階の被験者によってなされたものである。幼児が被験者に選ばれなかった理由の一つに、発達程度がある水準以上に達したものでなければ同列には扱い難いという経験的な常識にもとづく判断もあったかもしれない。

特に、この分野で用いられる凝集力を構成する要因がきわめて流動的であるだけにこの問題は重大である。たとえば、ふつうには好ましくないとされる成員間の衝突が、ある年齢の幼児集団ではかえって増加することがあるように思われる。しかも、そのコミュニケーションは却って活発化するというような事実遭遇した時、これをどのように解釈すればよいだろうか。

そしてそれに対する教育的な指導方針は、成人にたいする時のものと同じでよいのだろうか。

この答えはむずかしい。というのは、成人集団の場合には、集団目標が反社会的なものであるような特殊な場合を除いて、凝集力を高めることは、たいてい価値的に望ましいとされている。特に、集団の管理者にとっては、これが目的であることも少なくない。そのため凝集力の内容にまでさかのぼっての、善し悪しの吟味はあまりなされてこなかった。

しかし、子どもの、それも教育的集団にあつても凝集力を高めること自体が、つねに最高目的であるといえるだろうか。集団が解体するほど凝集力が低下しては、教育の機能さえ果たせないから、そのような状態は当然防止すべきであるとしても、一時的に、集団としての成長と、個人の健全な発達のための行動の種類の間には矛盾が生じるような事態を想定する必要はないだろうか。これ

をより一般的に言えば、発達途上の子どもであっても、どんな時にも、成人に望まれる行動特性を身につける方向にのみ訓練されなくてはならないのだろうか。それとも時には別の方向にむかうことが年齢によっては必要なこともあるのだろうか、というような問題になる。

この間にこたえるためには、成熟した人格特性を身につけるまでに迎えることが必要な、発達過程の経験とは果して何なのかを知らなければならぬ。

しかし現在の幼稚園の年齢段階の子どもが形成する集団の平均的特質の記述にとどまるような資料では、そのこたえは出てこない。だいいち、漠然とした、各年齢の平均的特質というものは、普遍的な意味があるかどうか、やや疑問に思われる。

なぜなら、さきにも述べたように、集団の性質は、構成員の特質のほか、たとえば、形成の動機や接触の期間や指導のしかた、そのほか種々の条件いかんによって変化する、そして逆に、所属する集団の性質によって幼児の社会的行動の発達そのものが影響をうけることも大いにあり得ることだからである。

現在、子どもたちの発育期に与えられている対人的環境は、きわめて限られたものにすぎない。その限られた経験によって発達した子どもにしか接する機会がないために、ともすれば、われわ

れは、子どもの環境や経験を変えてみる試みを忘れて、現状での子どもの集団行動を、軽々しくその年齢に固定的なものだと考えてしまう誤りを犯すことがある。

できるならば、乳児から成人までにいたる対人行動の発達のカニズムに関する理論を考慮に入れながら、比較的低い年齢段階からはじめて、子どもたちの集団のいくつかについて、やや長期間にわたって、一定の思いきった条件変化を与えて、それに伴う成長を比較しながら追跡するような研究が望まれる。

(新潟大学)

幼児教育講習会(予告)

日時 昭和四四年七月二二(火)〜二五(金)日

午前の部 九、〇〇——一二、〇〇

午後の部 一、〇〇——四、〇〇

会場 お茶の水女子大学講堂・体育館

講師名、演題等は次号でお知らせします。

主催 お茶の水女子大学附属幼稚園内

日本幼稚園協会